
カービィストーリー

Cocoa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カービイストーリー

【Nコード】

N2893Z

【作者名】

Cocoa

【あらすじ】

争いも滅多になく………それどころか宇宙規模の侵略すら起こったことのないとんでもなく平和な国、ププランド！主人公・カービイが住民達とワイワイガヤガヤやっていく話！

小説初の投稿です

作者からの注意事項

Cocoa「この小説を見た方はじめまして。Cocoaと申します！」

ゼロ「……自己紹介はいいからさっさと本編に入れ」

Cocoa「ちよつと待つて。これから読者の皆に説明したいことがございます！」

カービィ「説明したいことって？」

Cocoa「話がだいたいわかってても何でこんな奴がいる！？とかだったら困るでしょ」

カービィ「あー、そっか」

Cocoa「見事にちょうどいい例がここに」

ゼロ「明らかに……な」

Cocoa「では以下のことをあらかじめご了承ください！」

注意点その1『ダクマ族は味方キャラ』

カービィ「珍しいよねこういうのって」

Cocoa「何故か？理由はただ1つ、ダークマター族が悪役なのはワンパターンすぎてクソつままないから」

ゼロ「そりやお前だけだろ」

ゼロツ「そうでもないかもしれないけど……（多分）」

ゼロ「肝心のダクマ族は侵略する気はないっていう設定で」

ゼロツ「それと基本的にダクマ族に似たキャラも同族とさせていただきますのでよろしくー」

注意点その2『作者が出てくる理由』

Cocoa「出るけどしつこいってほどでもない」

ゼロ「しつこいだろーが。普通小説に出てくるか？出ないだろ？」

Cocoa「だから今回は説明だから……」

ゼロ「かと言ってどさくさに紛れて出るんじゃないのか？その後の話（本編）にも」

Cocoa「出ません！それにウチ（作者）が出てくるってことは重大発表があるってことだからそれだけは理解してください（ただし後書きは別とします）」

注意点その3『ギャグ（グロく下ネタ）多め』

カービィ「下ネタの割合高いって」

ゼロ「要するに作者は変人ってコト」

Cocoa「アンタに言われたくないし……」

カービィ（星キモツ）

Cocoa「とりあえずはですね『よい子の皆さんは真似しない（言わない）でください』対象のものが多いで……」

ゼロ「特にこれに関してはご注意ください！」

注意点その4『いろいろと暴走（by Cocoa）』

ゼロ「……それ言ったらおしまいだって」

Cocoa「頭の回転がフルなんだよー。よくメチャメチャになるけど！（きつぱり）」

ゼロ「（ハッキリ言っちゃったよこの人……）」

Cocoa「キャラも暴走し……」

カービィ「たまに乱心もある……」

ゼロ「かと言って作者もご乱心になることがある」

注意点その5『ストーリー構成について』

カービィ「お話どうすんの？」

Cocoa「ネタバレになるから言わない」

カービィ「作者ヒドイ！傷つくぅ！」

Cocoa「ウソだってウソ！謝るからどこぞのギャル系女子の口調やメテ！」

ゼロツィ「（ギャル系女子……）で、話は？」

Cocoa「自分で言うのもなんだけど、最初はクツソつまんねえ一話完結式の話を見せていただきます」

ゼロツィ「CocoaさんCocoaさん。超ヒドイこと言っちゃったよー」

Cocoa「ごめんなさーい」

ゼロ「もちろんストーリーも考えているよな！？」

Cocoa「Of ^{もっちゃん} course！」

カービィ「狂ってきたのかな……（ぼそっ）」

Cocoa「ただネタバレになるのでこれは言いません！」

カービィ（ケチだ……）

Cocoa「あと、場合によって文章の書き方も変わることもあります！作者の気分ではないのでご注意を」

注意点その6『Zero World』

カービィ「何コレ？ゲームでプレイしても出ない単語だけ……」

Cocoa「多分、ダクマ族をこのような設定にする人は少ないでしょうね……別名『ダクマ族家族設定』……」

ゼロツ「家族設定!？」

Cocoa「ネタバレになるんでこれも言いません!」

ゼロ「お父さんキャラかな……」

Cocoa「ピンポン」

ゼロツ「今ので充分ネタバレだよ?」

Cocoa「あ……」

カービィ「そうなるとゼロツは……」

Cocoa「だいたい想像はつきますよね? 答えはちゃんと書いておくので気になる人は見てくださいね!」

注意点その7『舞台は……』

カービィ「当然……」

全員「ププランド!」

Cocoa「……そうとは限らないけど」

カービィ「え?」

Cocoa「とりあえずププランドにも設定があって……」

ゼロ「もう読者は知ってるけどな」

Cocoa「……です」

ゼロ「……んで終わりか?」

Cocoa「終わり! 皆さんどうですか? おわかりいただけましたでしょうか?」

ゼロツ「わかった! っていう人は次からお話に入りますので……
続き行っちゃってください!」

Cocoa「最初は一話完結式の話になるけどストーリー制の話が出来たら発表します!」

ププブランドはいつも……

ゼロ「ではでは『Cocoaの7ヶ条』を見てくれた読者の皆さん
大変お待たせしました!」

カービィ「何、Cocoaの7ヶ条って……」

ゼロ「要するにCocoaによる教え全7ヶ条だ」

ゼロツ「教えじゃなくて注意事項なんだけど……」

ゼロ「いい。それでいい。少なくとも私はそうとしか認識してない」

カービィ・ゼロツ（コイツひでえ……）

ダークゼロ「初っぱなからきたよ、毒舌みたいなものが」

カービィ「堂々と言えるなあ……」

ダークゼロ「そんなことより作者から伝言っス!」

カービィ「あれ、そんなキャラだっけ?」

ダークゼロ「作者の設定上そんなだから仕方ないっスよ……」

ゼロツ「（読者の人達を混乱させるつもりかな……）で?伝言っ
て……?」

ダークゼロ「『最初は滅茶苦茶めいちゃくちやです。ストーリー編出来るまでしば
らく温かい目でご覧ください』だって」

カービィ「お話あるの!」?

ダークゼロ「作者曰く『話がないと小説ではないような気がする』
らしいっスよ」

カービィ「そりゃそうだよねえ……」

ゼロツ「要するにまだ出来てないってことでしょ。そのストーリ
ー編とやらが」

ダークゼロ「ピンポン」

ゼロ「ピンポンじゃねええええええ!」

ダークゼロ「（ウザ……）えー、これは作者が意図的にやってるん
スよ」

ゼロ「意図的に……?」

ダークゼロ「この作品ではダクマ族が『メインキャラ』として出てくるんスよ」

ゼロツ「イエーイ」

ダークゼロ「（悪役扱いされたから嬉しいんだ……）で、ダクマ族も出てきてよけいごちゃごちゃになると思うから……」

ゼロ「作者が一番ごちゃごちゃだっ！あいつの脳内思考意味不明！」

ダークゼロ「（文句言いおったー！）とりあえず日常編から始まるっス！」

カービィ「なんで？」

ダークゼロ「ああもう！さらに読者を混乱させるつもりかアンタ！？ごちゃごちゃのごちゃごちゃになったじゃん！」

ゼロツ「ゴメン、君の言うこともさらにややこしいよ」

ダークゼロ「と、とりあえず……日常編は主にカービィとダクマ族がどんだけ仲がいいのか、っていう感じで」

ゼロ「説明が適当だなお前」

ダークゼロ「……………」

ゼロツ「内容はほぼ思い付きで超いいかげん……Cocoaさん……ヤバいつてそれ」

カービィ「仕方ないよ、小説書くのがこの作品で初めてだもん」

ゼロツ「Fight！だね」

ゼロ「マジでクソつまんなかったらポイっしていいから」

カービィ「ポイっして……」

ダークゼロ「とりあえず前置きが長すぎなので始めるっス！」

ププランド

そこは事件など滅多に起きない場所……
なのでこの国の住民達は、

「あゝ……暇……」

大抵はこんな状態である
ただし……こんな人もいる

「うおりゃあー!!」

バリッ！

「……テレビ壊してどうすんの」
「あ」

平凡な日常にあまりふさわしくないこと テレビを壊すという破壊魔のような行動しているピンク玉……もといカービィ

「これ使いものにならないよ……」
「ゼロツ……ものはいずれ壊れるものだよ」
「……名言みたいなこと言ってるけど普通ゲーム中に液晶画面ぶち壊す人相当いないよ？」

多分こんな人（ ）はいませんね
もったもなことを言う白い物体……ゼロツ

さっきまでになかった悲惨な光景をただ見つめるカービィとゼロツ

「ゲームできなくなっ たね……」

「ま、しょうがないよ」

ため息をつくカービィだが突然こんなことをいい始めた

「今日もププランドは……平和だよね」

「……だね。なんでいきなり？」

「……なんとなくそう思っただけ」

ププランドは……ずっと平和……

誰もがそう感じている

ププブランドはいつも……（後書き）

終わったなこれ……

ゼロ「当たり前だ。話にすらなっていないし途中から壊れただろ」

脳内が暴走しました、ハイ

まあ、日常編は基本的こんな感じでいきますけどやっていける自信がない……

ゼロ「さっさとストーリー編出せよ」

ハイ……

期待してた皆さんマジでごめんなさい……！

新コピー能力発案大会！？

ゼロ「ひさびさ……のような気がする」

ダークゼロ「2週間ぐらい（正確には12日）だからそうでもないっすよ。まずこの時点で読んでる人少ないから……」

ゼロ「あーもー、うるさい。お前はアレですか、A型人間ですか？」

カービィ「いや、人間じゃないからね？」

ゼロ「擬人化すれば、の話だ」

ゼロツ「……話の論点ズレてるよ」

カービィ「んで……今回の話は？」

ゼロ「作者のことだから適当にやってるだろ？」

ゼロツ「ヒドッ」

ダークゼロ「まあそれは『日常編において』の話。ストーリー編入ったらちゃんとやってくれるよ」

ゼロ「……で、どこまでいったんだ？」

ダークゼロ「半分ぐらい……っす」

ゼロ「んなペースでちんたらやってるから……」

カービィ「文句言わない。それでもストーリー編は進行してるから」

ゼロツ「どんな話になるんだろっかね？」

カービィ「んなもん知らないよ！それより今回の話は……」

ゼロ「完全に作者の思いつきだ」

カービィ「そりゃそうなんだけど……はあ（相手にするのを疲れた様子）」

それでは今回からまともに日常編を開始！

舞台はもちろん ププランド！

「……………」

「何アニカビ見てんだよ、ミラマタ」

「別ニイジヤナイデスカ……………」

ミラクルマター、略してミラマタはボソツと言う

「最近『カービィWii』発売……………」

「もしもし？『64』以来登場してないからって…………おかしくなり
ました??」

というか『カービィWii』が発売したのは少し前ですが

「…………カービィノコピー能力ハ増エテルミタイデスネ」

「普通に増えてるよ」

「私ニモコピー能力増エナイデスカネ」

「悪役が考えた人にそんなサービスするわけないでしょ」

「最弱ノラスボスガ言エル立場ジャナイデスヨネ」

「『最弱』の単語出たよ（結局）」

若干ため息をつくダークゼロ（『ドロツチ団』をプレイしている
orしていた方は彼の弱さがわかります）

「アツ、チョツ…………アイスパークガ……………」

「64のコピー能力!?つかアニメにそんなもん出ないから!!」

「コピー能力ハコピー能力デモ『ミックス』トイウ名ノコピー能力
デス!!」

「どこにツツコミしたらいいのかわかんない!…………それでさっきか
ら何が言いたいワケ?」

「新コピー能力デモ考エテルンデスケド」

「……………あんたのコピー能力？」

ポカンとした声を出すダークゼロ

「普通に7属性でいいんじゃない？」

「ダメデスヨ。小説上『オリジナリティー』トイウモノヲ引き出し……………」

「いらなから。そんなもんいらなから」

即座に否定するダークゼロですが……………

今回の話はここから始まります

「とりあえず日常編初の（まとも？な）話でカービィ出て来なくていいのかな……………」

「インジャナイデスカ？」

「いや、主人公が出てこないと大問題じゃない？」

……………じゃあ強制的に出す？

「……ご遠慮しとく」

「なんで!？」

見事なタイミングでハモったダークゼロとミラクルマターにカービィのツツコミが飛んでくる

そもそもカービィさん……………今までどこに？

「近くの場所でゼロツーにほっぺ引つ張られてた」
「遊んでるんだけどね」

「要スルニ……ロリータコンプレックス、デスネ」
「普通にロリコンって言おうよ。使い方間違ってるし」
「ロリコンでもないしね」

当然、カービィは女ではありません

「エー？見タ目的二女ダト思ッテマシタ」
「見た目で！？」
「それより本題に入らないの？」
「あ、そうだった」

それでは本題に……

「……で、なんの話してたっけ？」
「コピー能力デスヨ！コピー能力！！」
「……あー！」

ダークゼロは思い出した様子

「ボクの？」
「ミラマタの方だよ」
「最近、ゲームで出番ないから小説こたでオリジナルコピー能力を出す
つて魂胆でしょ」
「全然違イマス」
「んじゃ、なんで……？？」

ミラクルマター曰く、以下の通りになったらしい

アニカビにハマった アニメオリジナルコピー能力を見た シュポ
ー!!! で、こうなった

「説明が意味不明なんだけど。しかも『シュポー!!』って何? イ
マイチ感覚的すぎてわかんないンスけど」

「一応興奮シテルンデスケド……」

「わかるか!!!」

「オリコピ出るのだいぶ後半の方だし……」

とりあえず見た方はわかります

「感情表現わからないのかな、ミラクルマターって」

「そうみたいだよ。基本的に無表情だし考えも全くと言っていいほ
ど全然読めないし……」

ミラクルマターに対するツッコミどころが満載のようだ

「つまりミラクルマターの新コピー能力を考えてほしいってことで
しょ?」

「マア、ソウデスネ」

「んなこと言われたって……そりゃあ」

「「「難しいんじゃない???」」」

「……デスヨネー」

そこ、言い出しっぺのくせに認めるんかい

「でも即出るのが水とかそういう系」

「……確かにそれぐらいしか思い浮かばないよね。この案はどう?」

「……ボツ!」

「なんで!」

「カービイノコピー能力ニ既ニアルカラデスヨ。パクリジヤナイデス力」

「いや……コピーってそもそも対象のモノにマネるんじゃ……」

「それちよつと違う……」

「どっちにしるオレはコピー能力」パクリしか考えられないのっ!」

(考え方が幼稚園児級……)

ついそう思ってしまうカービイだがそういう風に出てくるので仕方がない

「とりあえずボツ言つたとなると……」

「手におえないっスね。作者に頼むしかないでしょ」

「こつちも手におえない状況なので助けて……」

一瞬、「は!」となるがカービイの言っていることがわかった
ゼロツの手によって遊ばれていたからである

「あんた何してんのおおおお!」

「遊び」

ゼロツー本人はそう言っではいるが、周りから見ればオシオキ(「イタズラ」)にしか見えない

それにしても数秒の間でこつという行動するのか……早いな

「新種のイタズラ!」

「オシオキ……デスヨネ??」

「のんきに会話してないでこの状況どうにかして……」

……その後ようやくカービィを救出。かかった時間は30分弱という長時間のバトルを繰り広げていたということを追記する

ちなみにゼロツォーがカービィをいじりまくる理由……

「（カービィ自身が）もちもちしてるから」

……だそうです

「ロリコンだロリコン!!」

「女扱いしないでよおおお!!」

新コピー能力発案大会！？（後書き）

今回はまともに書いてみました、いかがでしょうか？

ゼロ「今回はまだマシな方なんじゃないか？」

ゼロツ「何その上から目線」

……それよりダークゼロ、ミラマタのオリコピを考えると……？

ダークゼロ「……スンマセン」

まあ、出たら出たで。ハイ

ダークゼロ「いいのかよ！」

ちなみに作者がミラマタのコピー能力を見た時の第1印象

- ・バーニング形態 ファイア……？
- ・アイス形態 アイスですよねー
- ・ニードル形態 見た目まんまやん
- ・ストーン形態 カチコチ
- ・ボム形態 毒……！絶対毒……！
- ・スパーク形態 最初はレーザーでしょコレ！
- ・カッター形態 新種の毛虫……！（断言）

ゼロ「お前の反応面白いな」

ミラクルマター「カチコチ……」

ゼロツ「ボム形態が毒って……」

ダークゼロ「一番ひどい扱いがカッターだしね。というかどうなっ

たらずう見えるわけ？」

パツと見そんな感じ……

ダークゼロ「カービィがそんなもん認識できたら即吐くよ」

……それもそうだね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893z/>

カービーストーリー

2011年12月28日22時52分発行